
はるかさんの場合

千鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はるかさんの場合

【Nコード】

N5395Y

【作者名】

千鶴

【あらすじ】

異世界トリップしちゃった彼女の場合、第二段。

一見普通な晴香さんは、ある日突然異世界に放り出され、その後どうなったのか？

そんなお話。

前編

ぷちり、頭の中で何かが切れるような感覚がしたと思った。次の瞬間には視界が暗転し、あっという間に何もわからなくなってしまうた。

けれども、そこで私は意識を飛ばすべきではなかったのだ。そこが運命の岐路だったと、誰がわかるだろう。

少なくとも私はそれに気付きもしなかったし、そもそもそれに抗うことなど、事前にわかっていたとしても出来るはずがなかっただろう。

後になって何度も思い返しては、ずっと後悔する破目になるなんて・・・このときの私は、もちろん知る由もなかったのだ。

「うおー・・・うみだ・・・」

意識が覚醒してすぐ、身に馴染む匂いが鼻を衝く。

ああ、また散歩に出た先で転寝でもしてしまったんだっけ、と暢気に目を開けた晴香は、そこでぴしりと停止した。

見慣れているはずのそれが、完全に違うものだとは認識してしまったからだ。

ぼろりと無意味な言葉が口から転がり出るのも止められず。かといって行動に移ることも出来ず。

眼前の紺碧に光る大海原をただ眺めるしか、術を持たなかった。

「おい、これも洗っとけ」

「あ、これもよろしくねー」

「おっちょうどいい、俺のもだ！」

「わりーな、俺のも頼むわ」

どさどさどさつと続けざまに降ってくる汚れた布の波に押し流されそうになって、慌てて足を踏ん張った。

一枚一枚は薄くて軽い布だって、何枚も重なると非常に重たくなるのだ。

少々非力な晴香は、毎回転びそうになってしまっ自分を支えるので精いっぱいだ。

しかし、これが晴香の今の仕事であるのは間違いないので、いかに足腰がふるふる震えようと、内心を億尾にも出すことはなく笑顔で回収して行った。

「はい、これで全部ですね？じゃあちよつと籠りますからあとよろしく！」

「おー、しっかりやれよ」

ひらひらと振られる手を後ろに、両手で山となった洗濯ものを抱え、洗い場に籠った。

濾過した海水に曝しながら、ぎゅぎゅつと揉みこんで汚れを押し出して行く。

「あー、せめて石鹸欲しい」

ぐいぐい押し込みながら、ため息とともに呟く。
しかしそれも叶わぬことだと知っているの、実際誰かにお願いする気もない。

独りで呟くくらい、多めに見てほしいものだ。

「せめて陸上だったらなー、潮って厄介なんだよねえ」

ふう、とまたひとつ息を吐く。

痺れるように疲労が両手から肩までを覆っている。

揺れる地面に身を任せながら、独りごちる。

ここは陸上ではない。

晴香が居るのは海の上、そしてここは船の中。

おまけにそれは、

「捗ってるか？これも頼む」

「船長・・・」

唐突に背後の扉が無遠慮に開けられ、大柄な男が姿を見せる。

振り返ってその姿を見やれば、手に服を持ってこちらを見ている隻眼の男。

「んじゃ、そこ置いといてくださいな」

「・・・おう」

しかしすぐに目を背けると、横に積み上げてある服の山を顎で示し、顔はまた洗い物の方へと戻す。

そっけなさすぎる晴香の態度に、船長と呼ばれた男が眉を顰めたのを、晴香が見ることはなかった。

洗い物を再開し、ちらともこちらを見てくれない晴香の背を見つめながらひとつ溜息を吐く。

船長が大人しく服を山の上に重ね、扉を閉めてすごすご出て行ったのを背後に確認すると、ようやく、ちらりと視線を投げた。

「・・・あれで海賊だっていうんだから、なんか、ねえ・・・」

女性に対しでかい態度を取ったり無理強いたりしないのは、勿論良いことだとは思っけど、晴香自身は海賊に紳士であることを求めたりはしない。

そういうイメージは持たないほうが良いとすら思っている。

彼らは無法者であり、その性分は掠奪者なのだから。

さりげなく酷いことを呟きながら、晴香は止まっていた手を動かした。

そう、現在晴香は海賊船で下働きをしている。

そういう名目で、養ってもらっている身だ。

「ああまったく、なんてとくに拾われたんだろう」

ぶつぶつと零しながら、手はさくさく仕事を成して行く。

こちらへ来てから既に半年が経過した。

初めは慣れなくて辛い思いもしたが、今では片手間に別のことを考える余裕も出来た。

事の始まりは、晴香が海のと真ん中で目が覚めたところから。

見渡す限り大海原にぽつんと聳える巨大な岩の上に、何故か晴香は転がされていた。

もともと海の側で生まれ育った晴香にとって、潮の香りはとても身近なものだ。

しかしそれも、何事にも限度というものはあるということを痛感す

る破目になっただけだ。

まず、目覚めてすぐに、見慣れた海の色よりも遙かに綺麗なコバルトブルーが目に見え込んできた。

おまけに辺りを見渡しても、陸地がちらりとも見えない。

そして極めつけは、

「巨岩の周りに鯨がうようよいるとか、反則もいいところよねー」

晴香が寝ていた岩の周りには、鯨と思しき影がたくさん泳いでいた。下を覗き込んで瞬時に血の気が引いた。

これは私の人生積んだなと思ったものだ。

しかし神は晴香を見捨てなかった。

少なくとも、命を拾ってくれるものが居たのだから。

その待遇がどうであれ、晴香は幸運だったと言えるよう。

「拾ってくれるのが海賊船じゃなきゃ、もっと良かったなー」

遠い眼をしながら、呟きを零す。

命があっただけ儲けものだ、しかし贅沢を言うならば、普通の船に拾われたかった。

絶望に襲われたその時、目にした唯一の希望の光が海賊船だとわかった瞬間、目の前が真っ暗になった。

次にふと眼を覚ました時、晴香は自分は死んだと思っていた。

否、海賊船に拾われるよりは死んだ方がましなんじゃないかとすら思っていた。

売られるか犯られるか殺されるかか思い浮かべない自分の末路など、考えたくもなかった。

なのに、次に目に飛び込んできたのは、オレンジ色の髪と顎鬚を持った隻眼の男。

『お、目が覚めたか』

日本人とは似ても似つかない顔立ちに、眼帯に隠されていない垂れ目をもっと垂れさせて。

へらりと笑ったその顔に、晴香の防御壁はすっかり崩れてしまったと言っているだろう。

自分でもまさかこんな簡単に、と思わなくてもないのだが。

如何せん、実は晴香は面食いだっただ。

欧米風の整った顔立ちは、実に晴香好みだったのだ。

「いくらなんでもまずいよねえ・・・」

ふう、とまたひとつ溜息を零す。

何が不味いと言えば、晴香が世話になっている身で船長の顔を直視出来なくなったことだ。

それを船長が不満げに思っているのは察している。

それでも容易に目を合わせられない。

合わせたら挙動不審になること間違いなしなのだ。

そう思えばこそその行動なのだが、傍から見れば晴香は非常に船長に對して冷たかった。

「何が不味いんだ？」

「うひょっ・・・きゃー!」

びっくう がたっ ばっしゃーん

「うおっ何やってんだハル」

突然背後の扉が開けられ、考えごとに没頭していた晴香は不意を突

かれて悲鳴をあげた。

おまけに勢い余って盥に激突し、中の水をぶちまけてしまった。
一応濡れても良いようにと風呂場に居たから助かったが、洗ったモノまで水浸しだ。

晴香は両手を床について頂垂れたまま、先程の衝撃が治まるまで待つと、恨めしげに背後を見た。

あ、ちなみにこちらではハルと呼ばれている。

どうやらハル力とは言いにくいらしく、名前を呼ぶ度もごもごしてるのが可哀想になったのだ。

「・・・船長・・・」

「いやっ俺のせいか!？」

「いきなり来られたらびっくりしますよ・・・」

私は一般人なんだって何度言えばわかってくださるんですか」

「す、すまん」

完全に八つ当たりである。

ここは船長の船であり、船長がルールなので、どう振る舞おうが勝手なのだ。

しかし顔を直視出来ない晴香は、勢いに任せて詰るしか術がなかった。

恨めしげな顔を隠さない晴香に船長が眉を下げつつ謝った。

・・・いや、だからそこで素直に謝る海賊ってどうなの。

向いてないんじゃないか、なんてことを思ってしまう。
こんな優しい人が、どうして海賊なんかしてるの、なんて。
そんなことを考える資格など、晴香にはないというのに。

「・・・いえ、すみません、こちらがぼーっとしてたせいです。
それで、何か御用ですか？船長」

ふい、と視線を逸らして問いかける晴香を、悲しげな顔で見つめる船長。

その視線に気づきつつも、気付かない振りをひたすら続ける。
ここで気付いてなるものか。

気付いてしまっても、どうにもならない。

——だって彼は私のモノになんかならないんだから。

「・・・特に、なんでも・・・いや、あるな」

俯いて返答を聞いていた晴香を見つめ、船長は言いかけていた言葉を途中で止めて、言い換えた。

それを不審に思い、つい視線を合わせてしまつて晴香は後悔した。

「なあハル、何でお前は俺の顔を見ないんだ」

直球ド真ん中で質問を投げつけられ、ついでのいつの間近づいていたのか、そしていつの間に壁際に追い詰められたのか、気付けば身体の両脇を手で塞がれ、逃げられないようになっていた。
いや、本当にいつの間？

ていうかこんな甲斐性があるとは思わなもごと。

「・・・あの、」

「俺の目を見て言ってみろ、ハル」

真剣な光を灯した隻眼に、射竦められる。

それでも目を見られないのだから、自分も相当重症だな、なんて思う。

船長の身体から溢れる威圧感がひしひしと身に刺さるような気がする。

ああ、なんとなく、船長っぽいなんて思うのは、現実逃避の一環でしょうか。

「・・・何で、見てくれないんだ？」

再度、今度は懇願するように問われて、思わず見上げてしまった。

情けない顔でこちらを見下ろしてくる目に、こちらと同じように情けなくも顔を歪める。

だって、拾われた身で、勝手にあなたを好きになってしまったなんて、誰が言える。

あなたはこの海賊船を率いる船長なのに。

おまけに私は異世界人らしいということを、ここに来て一週間めに知った。

つまりはこの世界の人間ですらないのだ。

「・・・はは・・・船長、かつこいいから、照れちゃうんです」

声が震えないようにするのが、今の晴香に出来る、精一杯だった。

船長がそれを聞いて、晴香の顔を見て、寸の間息を呑む気配がする。そのまましばらく固まっているようだったので、ここらで抜けだそうと身を振ると、唐突にくつと腕が締めつけてきて驚愕した。

「うつ！？ちょ、せ、せんちょ・・・！」

「ハル、本当か？俺、自惚れてもいいのか？」

ぎゅっと抱きしめられて、顔が、身体が、沸騰するように熱くなる。擦り付ける様に、ぐりぐりと頭部に顎が押し付けられている感触がする。

いきなりの相手の変化に、何がということなんだかさっぱりわからない。

「俺なあ、嫌われてんのかと思ってたんだよ。

初めの数回以外、ずっと俺のこと見てくれねえし、避けられてるし、態度は冷てえし」

うはっ、バレてら。

すりすりするのを止めないまま、とうとうと語りだした船長の為すがままになる。

このままではよくないとはわかっていたけれど、この状況にちよつと幸福感を感じてしまう自分の乙女心を今すぐ捻りつぶしてやりたい。

でも本能の前に、理性は弱いようだった。

半年一緒に過ごす間に、恋心は充分に育ってしまったのだ。

この腕の中に居たいと言う誘惑に、どうやら勝てそうもないらしい。無意識にへにやりと相好を崩した晴香に、船長の甘やかな声が降りかかる。

「もう、ずっとこのままだったら、俺はどうにかなっちまうんじゃないかってくらい思いつめてたんだ」

・・・え？

前編（後書き）

長くなったので分けました。

後編

・・・ええ？

すりすり、頭に頬擦りされたまま、ぴしりと固まる。

おっとなんだろう、なんだか今さらりと、聞き捨てちゃいけないよ
うなセリフが聞こえたよ。

「ずっと見てもらえねくらいだったら、いつそ監禁でもしちまおうかなあとかな。

足枷つけて。

首輪でもいいな。

・・・そうしたらあいつらに笑いかけることもねえ。

俺だけのになるだろ？

なあ？ハル。

お前の名前を呼ぶのも、俺だけだ」

ぞくっ

怖気が走ったような気がして、そろりと見上げると、ばちりと視線が合った。

気のせいだと思いたかったけど、よく見たら、目が、マジだった。

あの・・・ヘタレ船長どこ行った。

今すぐ帰ってこいと叫びたい。

「ええつとお・・・あの、別に笑いかけるくらい誰にでも」

「・・・あ？」

へらりと笑って言い逃れようとしたら、船長の声のトーンがずんと低くなった。

おっとやばい地雷だったようだ。

「いえっほら、愛想笑いてやつですから、ね？

・・ほんとに好きな人にしか、その・・笑いかけたいなんて、思いませぐえ」

「っ！ああちくしょう、やっぱり独り占めしてえ」

慌てて言い募った言葉は、途中で潰れたカエルのような自身の声に遮られた。

ぎゃああ圧迫感がー！

なんだか身悶えているらしいので、悪い意味ではないのだろうと推測する。

しかし・・・船長の ツボが わからない！

ぎゅうぎゅう締め上げられながら、知らぬ間にヤンデレ製造機と化していたらしい己を思わず呪った。

・・いや、まだこれは軽度だ。

今なら戻って来れるはず！

カムバックへたれ！！

「あの、せ、せんちょ」

「なあハル、やっぱり結婚しちまおうか」

言葉を途中で遮られるのもそうだが、言語が通じてなさそうなのが一番こわい。

異世界トリップしたらしいと知った最初の頃、言葉が通じることに安堵したはずなのにどうしてこうなった。

現実逃避だと自覚しながら、何がきっかけでヤンデレの扉が開いたのだろうと自問自答する。

ていうかもうこうなったら更生は無理な気がします。

「ハル？」

「ぐえ．．ちょ、船長くるしい内臓が出る」

「大丈夫だ、何が出てようとお前は可愛い」

訴えたら、嬉しいような複雑なような言葉に宥められた。

出てちゃいかなん何かが出てたら、どんなに愛らしいビスクドールでも怖いと思うんだ。

困り顔で見上げてみれば、蕩けそうな笑みが降ってくる。

でろでろに甘い顔と声に溶かされて、何も見えなくなったら、きつと私はそれでも幸せだ。

囲われて、船長だけの世界になっても、むしろ喜んで生きていけるような予感がする。

そうわかってしまう自分が居て、余計に背筋が泡立ったような感覚に怯える。

自分の中に、ヤンデレ要素があるだなんて知りたくもなかったよ。

「あの、あのね．．船長．．私のお話、聞いてくれますか．．？」

「っ！！」

精一杯のオネダリ顔と声を作る。

内心、悶えるような羞恥心に犯されて、叫びだしそうになる自分を撲殺しながらその状態を維持する。

不意を突かれたかのようにぼっと顔を赤くする船長につられて、顔

が熱くなる。

それでも、今言わねばヤンデレ籠の鳥ルート一直線だ。
そうだ、それだけは避けねばならない。

「な、なんだ・・・？」

「船長、私のこと、どう思ってるんですか？」

直球で聞かずとも、自惚れじゃなく多分わかる問いを投げてみる。
せめてヤンデレじゃなく普通の恋人ルートに戻したく存じます。
それが自分にとっても最上の未来なような気がして。

こんな状態でも小賢しく働く自分に、内心で唾棄しつつ、船長の反応を待った。

「お、俺・・・俺な、お前を拾ってから今までずっと、お前のこと、」

「ねえ船長・・・お前じゃなくて・・・名前、呼んでくれないんですか？」

真っ赤になって必死に言葉を綴る船長をあえて遮って、尚も強請った。

そう、小悪魔を狙ってみよう作戦です。

正直こんなガラじゃないけど。

今にも鳥肌立ちそうでやばいけど。

「は、ハル・・・」

へにやりとへたれる耳が、船長の頭上に見えた気がした。
おかえりへたれ船長。

船長から見えない位置でにやりと笑う。

ふるふると震える様が嗜虐心をそそる。

自分の中でまた新しい一面が発見されたようです。

「ね、船長、ハルカつて、呼んで・・・？」

更に言い募れば、これ以上ないくらい顔を赤くした。

こんな傍から見れば悪女と言っても差支えない翻弄っぷりだが、内心ではあまりにも自分じゃなくて奇声の嵐だったりする。

あああきもちわるーい！！

「は、る・・・か・・・」

「せん・・・んんっ！？」

あつれー！

このまま攪乱してうやむやにさせちゃうつもりが、何故かキスされている。

あつれえええええ！！

「ちょ、せんっ・・・んー！」

慌てて静止しようとして、尚も続けられる行為に、化けの皮があったりと脱げてしまった。

ていうか生まれて此の方19年、一度もキスなんざしたことなかったんですけど！

ファーストキスがディープってどういうこと！

「ん、ふっ・・・んん・・・は、はあ」

「ハルカ・・・」

長々と続けられたおかげで、すっかり腰砕け。

ぐったりと腕の中で凭れるまま、頭上から降るうっとりとした声を聞く。

ふっ、満足そうで何よりでございますわよどちくしょう。

「なあハルカ、部屋行くか、ああ今日から一緒にいいよな」

「えっ」

「ああ俺、生きててよかった」

「意味がわからん！ちよっきゃー！」

・・・そんなこんなで、結局晴香は、船長の妻の座に座ることになったらしい。

らしい、というのは、晴香の中にある一般常識としての婚姻に関する事項には掠りもしなかった為、あまり実感が湧かなかったせいである。

結婚式しかり婚姻届しかり、誓いすらしなかったのはちょっと寂しかった。

海賊であるが故、実質法など関係ないということもあり、事実婚という形に落ち着いたのだ。

そうして得た地位から見た世界は、また見えていなかった事実をも晴香につきつけることとなった。

晴香の前ではでろでろに蕩ける顔をする船長が、実は冷酷無慈悲の大海賊として名を轟かせていたり。

実は拾った当初から、部下達には必要以上に晴香と接触しないよう通達していたり。

それを破ってしまった部下が3日間食事抜きや危険なお仕置きをされていた、なんて。

世の中には知らないで良いこともあるのだと、晴香は痛いほど実感したのだった。

けれども、幸せであると言わざるを得ない今の生活の中で、度々こちらに来るきつかけとなった出来ごとを回想したりする。

あの時、もし目を瞑らなければ。

そんなことを考えてしまう自分も居るのだ。

そう、例えば、夫である船長の重い愛に怯えたときなんか。

「・・・ハルカ？何、他のこと考えてんだ。

俺のことだけ見てるよ・・・じゃなきゃ、その眼、潰しちまうか？」

「すみません他の事なんか考えてないからその手に持つてるアイスピック放して！」

・・・とにかくにも、巷で話題の異世界トリップ。

これは、すっかりヤンデレを釣ってしまった晴香の場合。

後編（後書き）

最近ヤンデレばっか読んでたら、うっかかり触発されてしまった模様。
反省はしているが、自重はしない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5395y/>

はるかさんの場合

2011年11月17日00時29分発行